

Bernard Pouderon
Les apologistes grecs du II^e siècle
(Initiations aux Pères de l'Eglise)

Paris: Cerf, 2005, pp. 355.

戸 田 聡

本書の著者 Pouderon 氏（1951 年生まれ）は、2 世紀の護教家アテナゴラスを論じた論考及びその著作の批判的校訂によって 1986 年に学位を取得し¹⁾、以後いわゆる護教家教父を中心に初期キリスト教に関する研究を精力的に進めている。氏の経歴・業績の詳細は次の URL から参照できる。

http://umr6576.cesr.univ-tours.fr/fichiers/cv/Bernard_Pouderon.pdf

この経歴に即して見るなら、本書は 2005 年時点までの氏の研究の総括と評することができよう。つまり、氏の代表作の 1 つと評してよいのではあるまいか。

本書は、護教家教父全般を総括的に論じた前半部分と、各教父・各著作を個別に論じた後半部分に分けられ、このうち後半部分は、いわゆる教父学の標準的参考書における各教父の著作・思想の解説と大幅に重なる。本評ではこのうちの前半部分に重点を置いて論評を行ないたい。護教家教父を今日研究することに関する、自他ともに認める専門家の観点を知ることが、本書の評価に際して最も重要だと考えるからであり、また他方で、後半部分で著者に目覚ましい創見を期待するのは過大な要求だと考えるからである（さもなければ、教父学の成果が一著者の一著作によって簡単に変更可能なことになり、学問自体の信頼性が揺らぎか

1) Athénagore et son œuvre と題された学位論文において一体を成していたこれら部分は分離され、それぞれ B. POUDEON, *Athénagore d'Athènes. Philosophe chrétien* (Théologie historique, 82), Paris: Beauchesne, 1989 及び B. POUDEON (ed.), *Athénagore. Supplique au sujet des Chrétiens. Traité sur la résurrection des morts* (Sources chrétiennes, 379), Paris: Cerf, 1992 として公刊されている。

ねない)。なお、専門誌上で既に見られる本書の書評の中にはこの点に関連するものがあるが、これについては後で触れる。

本評で本書の前半部分と称しているのは具体的には第1部「護教文学への序論」(21-105頁)であり、第1章「護教論の『生活の座』—政治的状况」、第2章「護教論の『生活の座』—宗教的・知的環境」、第3章「護教文学の諸々の大テーマ」、第4章「最初のキリスト教神学」という4つの章から成る。巻頭の序論で著者は、一般に護教論が外の者(他者)に対する(ad externos)著作であることに注意を促している(14頁)。自明な事実だが、これによって議論の運び方(使える論拠, 他者への態度等々)が大幅に規定されていることは、護教論を扱う上でゆるがせにできない。ついでに言えば、キリスト教の信仰・文化が自明の前提でもはやなくなりつつあるヨーロッパにおいてなお古代のキリスト教著作家(としての護教家)を研究することの意義を, Pouderonはこのあたり, すなわち護教家が他者(非キリスト者)に向けて行なったキリスト教の提示, という点に求めているように見える。本書の末尾(321頁)で護教家の著作を今日読むことの意義を説くところにも見られる, 自らの研究の意義を対自化しようとする著者のこの姿勢は, 当然とはいえ大いに評価されてよい。

本書が文学ジャンルとしての護教論の展開に注目していることは, 類書にない特徴と言えるかもしれない。すなわち序論(15-16頁)で著者は, 護教論というまとめ方が17世紀の学者に由来することを確認しつつ, しかし当のジャンルにはそれなりの統一性が認められると論じ(第3章冒頭), 上で述べた後半部分(本書の第2~4部)のうちの第2部「ジャンルの定義に向かって—起源からユスティノスまで」と第3部「ジャンルの多様化—タティアノスからテオフィロスまで」で, 主な護教論を時代順に配して個々の護教家・護教論を解説しつつ, 全体として文学ジャンルとしての護教論の展開を跡づけようとしている。2世紀の教父の多くは護教家なので, この論述で著者は, 初期キリスト教文学の歴史のうち2世紀のギリシア教父に関する部分について新たな提示の仕方を試みたものと評してよい。

以下第1部を詳しく見ると, 第1章は護教論成立の時代的背景として当時の政治的状况を論じており, 例えばキリスト教徒迫害に関しては, キリスト教徒はその「名」のゆえに迫害されたとする従来の理解が踏襲されている(23頁)。より一般的にキリスト教徒とローマ帝国の関係については, 無神論, 公民精神の欠如

(例えば公職忌避)、軍務等での忠誠心の欠如といった批判に対して護教家はキリスト教徒たちを擁護し(30頁)、彼らを忠良な帝国臣民として提示した(32頁)、と本書は述べている。

第2章では当時の宗教的・知的環境が論じられる。ギリシア・ローマの伝統的宗教が衰退し、人々の宗教的欲求を満たせなくなっていった中で、帝国統合の紐帯としての皇帝礼拝と東方由来の諸宗教が広がり、さらに教養ある人々の間では哲学(プラトン主義、ストア派等)が精神的・霊的慰藉をもたらす。そのような中にキリスト教は自らの発展する土壌を見いだした——このような基本的認識のもと、護教家たちの活動が知的・宗教的側面から描写・評価されている。彼らが哲学者を自任し(現にその大半は哲学の教育を受けていた)、キリスト教それ自体を哲学、しかも唯一の哲学として提示した(39頁)という点は、先ごろ亡くなった Pierre Hadot が特に強調していたが²⁾、これに加えて本書は、異教哲学に対するキリスト教の根本的相違として、寓意的解釈を駆使して異教哲学が受け入れてきた都市の神々をキリスト教が拒絶したこと(40頁)、また、信仰を理性的知識の上に置いたこと(41頁。これは、神は理性的には把握できないと主張することに等しい)、といった点を挙げている。さらに、異教哲学者たちによる批判が、死者の復活という考えは馬鹿げている、キリスト者の殉教は頑迷さの結果だ等々、キリスト教の信仰面・実践面にも向けられていたことが指摘される(42-43頁)。この他、ユダヤ教との論争で問われていたのはキリスト教のアイデンティティーの問題だ(49頁)、また、グノーシス主義者たちとの論争との関連で、護教家の1人ユスティノスは異端論駁(hérésiologie)の創始者と位置づけられる(52頁)、といったことが述べられている。

第3章では、護教家の著作に再三出てくる主題や、逆にあまり出てこない主題が、「護教的主題」「宣教・宣伝的主题」「論争的主题」に大別されて概観されている。本章の醍醐味は、各論点に即して著者が護教家たちの著作を縦横無尽に引用するところにあるが、それを限られた紙幅の中で紹介するのは不可能であり、他方各々の主題自体は、例えば「哲学としてのキリスト教」といった既知なものばかりなので、網羅的な紹介は不要だろう。ここでは、預言を論拠としてキリスト教の真理性を強調する主張が護教家たちの中で(程度差はあるが)広範に行な

2) P. HADOT, *Qu'est-ce que la philosophie antique?* Paris: Gallimard, 1995.

われた (72 頁), 道徳を論拠とする主張も広範に行なわれ, 護教家の著作の中には自他の回心の記述が見られる (74 頁), これに対して理性的論証は, アリストイデスの場合以外には重要な役割を果たしていない (77 頁), といった指摘に注目するとどめる。

第 4 章では護教家たちの著作を基に「最初のキリスト教神学」が描かれ, 例えば彼らの三位一体論は基本的に「ロゴスの神学」である (91 頁), といった指摘が見られる。なお, ここで読者は, 教父たちの思想は教会 (より正確には, 教会の中で後に正統派とみなされたグループ) の正統教義と必ずしも直ちに同一ではない, という点に注意する必要がある。これは本書への批判ではなく, 著者自身は例えば, 「三位一体」という単語 (ギリシア語の *τριάς*, ラテン語の *trinitas*) の使用が確認されるのは 2 世紀末以降であり, しかもその語義は今日理解されるのと必ずしも同様でない, といった点を明確に述べているのだが (90-91 頁), 様々な著作家の著述を横断的に利用して「最初のキリスト教神学」が論述される場合には, 論述する側に都合の良い引用 (断章取義) の可能性が否定できないので, ここで注意を促しておきたい。

本書に対して既に専門誌上で発表された書評のうち, ここでは英語圏の 2 誌のを見ることにすると, まず Judith Lieu の書評³⁾については, 本書を「useful volume」と評し, 但し紀元 70 年以降のユダヤ教に関する見方はやや時代ががっている, としていることにのみ触れておけばよい⁴⁾。次に, Oxford の教父学者 Mark Edwards の書評⁵⁾は, 本評とは逆に本書の後半部分に注目して, 「議論を必要とする多くのトピックが或いは無視され, 或いは, 著者自身の立場と異なる立場が軽蔑的言及とともにしか扱われない」と本書に欠けている点を指摘し, 以下いくつか具体例を挙げている。そして全体として本書を「このように優れた著者からは期待してよいはずの学問上の進歩を伴わない, 学術的文献への追加物」と評し, Pouderon より一世代前の教父学者 Robert Grant が 1988 年に公刊した

3) *Journal of Ecclesiastical History* 57 (2006), pp. 739-740.

4) Lieu は本書の文献目録中に M. Marcovich の校訂になるユスティノスの *Apologiae* が含まれていないことを「surprising omission」と評しているが, Marcovich の校訂は, 校訂者の主観を極力排すべきという文献学の基本を無視した極めて危ういもので, むしろ文献目録に含めないこと (或いは含めても, その問題点を指摘すること) こそが見識ある行為だと言ってよい。

5) *Journal of Theological Studies* 58 (2007), pp. 702-704.

「よりエクセントリックでより闘争的な研究」⁶⁾を本書は凌駕している感じがしない、と述べている。この Edwards の論評については、確かに、以上見てきた本評からも明らかなように、Pouderon の著作が全体として目新しさを欠くことは否みがたい。しかし上述のように部分的には新しい視点・方向性も見られるのであり、かつ、こういう分野の研究の存在意義にまで立ち帰った言及が見られることは、人文科学が社会的に貶められている今の世の中ではむしろ評価すべきことだろう（今どき研究の存在意義を顧慮せずに学問的議論に沈潜できるのは、Oxford の教父学者のような一部の特権的存在に限られる）。他方、個別的内容に対する Edwards の批判に関しては、その後 Pouderon を編者の一人とする『キリスト教ギリシア語文学の歴史』の刊行が同じ叢書から始まっている⁷⁾。これまでのところ、方法論的内容の序説を成す第 1 巻（評者未見）だけしか出ていないので、Edwards が行なったような内容的な批判への応答はまだないのかもしれないが、しかるべき議論が行なわれるのを期待したい。

Kendeffy Gábor

Mire jó a rossz?: Lactantius teológiája

(ケンデフィ・ガーボル 『悪は何のために善か？

——ラクタンティウスの神学』)

Catena Monográfiák 9., Budapest: Kairosz Kiadó, 2006, pp. 312,

ISBN 963 662 004 0, ISSN 1587-2599, A/5, 3500 Ft.

秋 山 学

本書の著者ケンデフィ・ガーボル氏は 1962 年生まれ、現在ハンガリーの首都ブダペシュトに本拠を置くカーロリ・ガーシュバル・プロテスタント大学

6) R. M. GRANT, *Greek Apologists of the Second Century*, London: SCM, 1988.

7) E. NORELLI & B. POUDERON (eds.), *Histoire de la littérature grecque chrétienne*, vol. 1 (Initiations aux Pères de l'Eglise), Paris: Cerf, 2008.